

「日本風景街道」は現在、全国131ルートで展開されており、行政や住民、企業などが地域ぐるみ連携し、自然や景観、文化などその地ならではの資源を再発見して、地域活性化や観光振興を図っているのが特徴。ふるさとを美しく、元氣にと知恵を絞る、地道な活動を積み重ねる熱い取り組みが、風景街道を支えている。

大阪府太子町の道の駅「近つ飛鳥の里・太子」とその周辺で10月、「街道1400年祭『時代行列』と『灯路祭り』」が開催された。街道2キロに立ち並ぶ石灯ろうや地藏堂の手づくり灯ろうのライトアップ、古民家でのギャラリー展示やコンサートなど、地域住民の多彩な企画が観客の笑顔を誘った。

太子町は、聖徳太子の墓所とそれを守護する叡福寺など歴史遺産の活用を努めてきたが、わが国初の官道「竹内街道」が、隣接市町村をつないできた重要な役割をアピールしようと、平成18年度に登録された日本風景街道「悠久の竹内街道」の活動を推進してきた。



最古の官道「竹内街道」で歴史イベント



散策のため整備された奈良県葛城市染野付近の竹内街道跡(国道166号) 写真右側と紅葉にいだかれた、相撲発祥ゆかりの當麻寺



(613年)の条に「難波より京に至る大道を置く」と記載がある。これが日本初の官道とされ今年が官道1400年の節目に当たる。これを記念し、大道と言われる竹内街道沿道の大阪府、奈良県内12自治体と産学民が連携して「竹内街道・横大路 難波から飛鳥へ日本最古の官道(大道)」1400年活性化プロジェクトを立ち上げ、様々な催しを展開した。

プロジェクトのスタートは3月、奈良県の「せんとくん」、大阪府の「モットちゃん・キツトちゃん」など沿道自治体のゆるキャラや、応募した地域の人々200人が、近鉄阿倍野駅から特別列車で近鉄飛鳥駅に到着。沿道自治体10首長が「古代の道からまちづくりを共通理念とし、ともに地域活性化を推進します」と宣言した。

石舞台古墳前で歴史劇 仁徳天皇陵などの古墳群や相撲発祥ゆかりの當麻寺などの歴史資産巡りウオーキング(堺市、葛城市など)、1400人参加の神社参道パレード(橿原市)、夜桜の石舞台古墳前での歴史劇公演(明日香村)など多彩な趣向が週末・祭日ごとに沿道各地で繰り広げられている。

「私はただの竹内街道オタク。好きなことを夢中で語り歩いていただけです。皆さん、悠久の竹内街道の魅力とパワーに突き動かされているので」と隅田さん。

プロジェクト推進役の一人、NPO法人ゴダイの石井聖美理事長は「地域ごとのボランティアさんが楽しんでくれているからいいのでしょう。私も飾り結び作りが好きな普通の主婦ですが、指先を使うから老化防止に良いと頼まれ教えています。いろんな仲間

のつながりでまとめ役を仰せつかっているだけです」。仲間の一人、NPO法人「竹内街道を歩き隊」の隅田禎一理事長は20年ほど前、大阪市から堺市に引っ越し、近所の金岡神社に初もうでに行った際、優雅な社殿や樹齢900年という御神木の楠や、近くを通る竹内街道に不思議な感動を覚えたのが縁という。今の国道と重ならず昔の風情が残る風景を探し歩き、太子町の竹内街道歴史資料館に通い続け、定年退職を機に、堺市の余暇講座で意気投合した受講生や石井さんと2つのNPOを設立。延べ40回約3000人参加の竹内街道を歩く会の催しがさらに仲間を増やし、風景街道の活動と1400年プロジェクトの起爆力となった。

「1400年記念 緑の里塚」除幕式も行われた。様々なイベントなど活動は、沿道の各市町村で来年も続く。

本土の最西端、目の前に東シナ海が広がる長崎県の西海岸一帯は、どこも夕日が美しい。新旧二つの西海橋や生月大橋など長大橋独特の機能美と、眼鏡橋など石橋の風趣も味わえ、大浦、田平天主堂など国宝級の教会建築群にも足を延ばせ、風景街道の魅力が堪能できるのが「ながさきサンセットロード」だ。

「長崎教会群とキリスト教関連遺産」は平成19年に世界遺産に暫定登録され、今夏の文化審議会も正式登録申請をOKしたが、政府調整で見送られた。でも、風景街道推進グループは問題にしていないう。十分な魅力に自信を持っているからだ。

観光ガイド組織設立

大学から大手旅行社勤務まで長く故郷を離れていたから、余計郷土愛が強まった。定年後の平成14年に戻った平戸の貴重な歴史遺産や豊かな自然の価値を、観光客たちに知ってもらうためにも、案内者が不可欠と感じ、早速、ボランティア観光ガイドに参加。平成16年にNPO法人化に携わった。

美しい夕日と橋と教会と



あかね色に染まる九十九島一帯(写真右)と信者から秘話も聞いた黒島天主堂ツアー



■風景街道 意見交換会で活発な論議 日本風景街道のテーマ別意見交換会が11月、「案内看板・地図をつくる」をテーマに開催された。2月の「自然の中を歩くための環境整備」、9月の「木・花を植える」に続く第3弾。参加したのは、萌える天北オロロンルート/出羽の古道 六十里越街道/浅間・白根・志賀さわやか街道/時空から天空への道 日光街道/佐渡國しま海道/東海道「駿河2峠6宿風景街道/悠久の竹内街道/人間文化の原風景〜ご縁をつなぐ神仏の通ひ路〜/むれ源平石あかりロード/九州横断の道 やまなみハイウェイの10ルート代表たち。

「目的地を表し、今どこにいるか分かることが大切。混乱を招かないよう統一が必要」「警察や自治体の規制もあり、占用許可申請など手続きが煩雑」など、活発な意見が出た。なお、9月の「木・花を植える」の参加者は、十勝平野・山麓ルート/ふくしま浜街道ハッピーロード/江戸・東京・みらい街道/日本の原風景「枝垂れ桜の咲く里への回りの道」/渥美半島菜の花浪漫街道/「合掌・さくら」飛越街道〜世界遺産をめぐる道〜/いやし・もてなし神山街道/日南海岸きらめきライン/やんばる風景花街道一の9ルート。

■来春、静岡で日本風景街道大学 日本風景街道の制度を持続させ、知恵を出し提案し合おうという「日本風景街道大学・ふじのくに静岡校」が平成26年2月、静岡県県庁と常葉大学静岡キャンパスで開催される。「日本風景街道の自立・充実・飛躍をめざして〜地域の思い、誇りを長く持ち続けられる制度にするために〜」がテーマ。日本風景街道大学は、風景街道の活動推進のため、多様な担い手がともに学ぶ場として、これまで宮崎で開催されている。

米国の「シーニックバイウエイ」は仕事柄よく利用し魅せられていたので、これにならった風景街道制度が平成19年にスタートしたときは率先して名乗りを上げた。案外交流がなかった西海岸沿岸6市町53団体の連携と、夕日、橋、教会の景観と歴史を前面に出したコンセプトづくりなどに尽力し、第一陣ルートとして登録された。

「橋、教会、観光客に人気のある平戸港周辺の旧城下町の魅力は、地元ならではのところ。歩いておきの話を聞きながら、ぶらぶら歩いてこそ、良さがいつそう感じられるのです」と籠手田さん。

地域ぐるみで活動

長崎市や県では、ぶらぶら歩く意味の方言「さるく」をもじり、パビリオン新設などでお金をかけずに既存観光施設などを歩いて楽しんでもらう「長崎さるく博」を成功させた経験を大切にしている。昔の通りの名を復活させまちづくりを活用する国土交通省の制度導入にも熱心という土地柄もある。

「標識や看板は、地元の人も旅行者・観光客にも分かりやすく、安全で迷わない表記を考えるべきだ」

ながさき サンセットロード